

重右衛門話考

阿彌周宜

一

重右衛門話とは、通称「印内の重右衛門」と呼ばれる主人公にまつわる一連の笑話のことである。この話は、昔話の分類によれば、「おどけ者」の話に属し、主人公は享保年間に江戸幕府直轄の行徳領印内村（現船橋市）に実在した小農民だと言われている。その分布範囲は、私自身の探訪調査から千葉県下、船橋市や市川市を中心とし、周辺地域の松戸市、浦安市、鎌ヶ谷市、習志野市や東京都下葛飾区、江戸川区の広きにわたることが確認された。

ここでは紹介の意味から、重右衛門の人物像を要約すると、次のようになる。重右衛門は作男として下総印内周辺の大農家や漁師に奉公して村々を転々とした。頗智に優れ、旦那の口のきき方が気にいらぬと、言葉尻を捕えて揚足取りをした。それどころか、実力行使も辞せず、とぼけの仮面で顔を包み、幕府役人を叩くこともしたと言う。また、一見物臭で周囲をやきもきさせながら、いざ仕事となると常人の何倍もの力量を發揮したと言う。奇行ゆえにどの奉公先でももてあまましたが、北方（現市川市）の久兵衛宅では旦那やお

力ミさんの秘薬「機転丸」で使いこなされ、さすがの重右衛門も年季明けには悔し涙を流した、というように真実味を帯びた話として伝えられている。

このように重右衛門話が、日本のおどけ者話の中では最も首都圏に近く、市街化の著しい地域において、今なお伝承されていることは、極めて注目に値する。そして、伝承者はかつて、あるいは現在において農業（一部漁業）関係者が多く、戦前奉公や小作の辛苦をなめた世代も少なくない。そこで、ここでは重右衛門話成立の背景を探ってみることにする。

二

これまでの入手資料に基づき、二百五話を検討した結果、別表の如く、四十六話の話型を確認した。管見ながら手元にある資料を並べてみると。『房総の民話』（昭45、未来社）、『重右衛門ばなし』（昭52、青史社）、『房総の笑話』（昭53、土筆書房）、『市川の伝承民話・第一・二集』（昭55・56、市川民話の会）、『行徳昔語り』（一・六号）（昭54・58、行徳昔話の会）、『市川のむかし話』（昭55、市川民

話の会)である。これらの資料を分析すると、一口に重右衛門話と言つても、中には他の笑話の利用にすぎないものが多いのに気がつく。重右衛門話に限らず、一つの話が人口に膚浅するにつれて、周辺のさまざまな話を吸引し、発展していくのは当然の習いである。

まず他のおどけ者話との共通例をあげてみる。「ひとり駕籠」や「米の飯の弁当の仕事」は全国的な笑話である。また「いざとなつたらの仕事」は、福岡の「伯賢さま」や鹿児島の「鎌田びっちょ」話にも見られる。「青い物は草」は、「のどは街道」という福島「とうすけどん」話の変形と言える。以上の話は頻度が多く、かつヴァリエーションも多く、他地域にも分布していることから、当地独自の昔話とは言えないだろう。一方、「九万のハチ」は石川の「三右衛門話」に、「狼の皮」や「種三度まき」は佐賀の「勘右衛門話」や大分の「吉四六話」としても有名である。⁽²⁾ そして、これらは当地における話数頻度が少ないが故に、なおさら重右衛門独自の話とは考えにくい。以上、個々の類話を見証して比較する紙数がないので、ここでは「沢庵風呂」をあげてみる。

「いやお湯をさますのは沢庵が一番いいっておカミさんが教えたから」
「ついで、そういうひねくれた人だつていう話がありますがね。⁽³⁾

(船橋市印内 田中長吉)

「そうですか」って、沢庵を一切入れて、お茶飲んだって。
その晩に主人がお風呂に入つて、
「重右衛門、お湯が熱くてしようがねえから、うめてくれ」
つたら、重右衛門は沢庵突っ込んだって、
「何だ、おい。お湯の中に沢庵突っ込んで」

これは明らかに馬鹿智話の利用である。しかし、重右衛門の話は主人公の意識的狡猾さが強調されているのがわかる。このように、全国的な笑話が重右衛門の名を冠せられ、彼流に味付けされて、重右衛門話に組入れられたことは想像に難くない。とはいって、それがいつどのような形で移入または集合されたかについては、余りにも分布が広い話ゆえに判断できかねるのである。

そこで次には重右衛門話の近隣地域に的を絞つてみることにする。採訪調査から、江戸川をはさんで松戸市北部、流山市、東京都葛飾区、埼玉県三郷市では、重右衛門話の代表的類話(例ええば「米の飯の弁当の仕事」、「一直線の田うない」等)が「六兵衛話」として伝承されていることが判明した。しかし、今のところ六兵衛話とは主人公の具体性に乏しく、より昔話化されており、重右衛門話との因果関係を探ることはできなかつた。

「重右衛門、沢庵を入れると、お湯がはやすめるよ」
つて言つたって。その頃は漬物つて言うと沢庵でしょ。重右衛門は、

「熱くて飲めねえ」
つて、そのおカミさんが、

「重右衛門、沢庵を入れると、お湯がはやすめるよ」

つて言つたって。その頃は漬物つて言うと沢庵でしょ。重右衛門は、

注目すべきは、房総半島南部に伝承されている笑話である。まづ、君津市や富津市周辺で聞かれる「水汲み」という話を例にあげよう。

むかし、むかし、この土地に重兵衛というおもしろい男がいた。

ある時、旦那が、重兵衛にいった。

「重兵衛や井戸の水を汲んでくんる」

「旦那、なんに汲みまへいか」

「なんでもええから、底のあるもんにくんでくんる」

といったので、重兵衛は勝手から大ザルや小ザルを持ち出してきて、井戸端にゆき、つるべで水を汲んでは何度も何度も、その

ザルの中に水をあけていた。

やがて、旦那は重兵衛の水汲みがあまり遅いので、井戸端へ見にゆくと、重兵衛は、まだ、ハアー、ハアーといいながらバタンバタンとつるべの水をあげていた。

旦那が不思議に思つてそばに寄つてみると、水溜りの中に、いくつものザルが置いてあったということです。⁽⁵⁾

(富津市岩瀬 原話・大野はる氏)

むかし、房州の増間の人たちは、トウガラシは、遠火でゆっくりと焼いてから粉にするものだと教えられていた。

ある日のこと、夜なかに半鐘が、ジャンジャン鳴り出し、火事だ、火事だと大きさわぎになつた。

すると一人のおやじは裏庭へ飛び出して大きな声で女房に言った。

「おおい、おつかあ、トウガラシを出して、みんな持つてこい。いまのうちだ。トウガラシを遠火で焼くべい」

このことを聞いた女房は、あっけにとられて、すぐには返事もできなかつたということです。⁽⁷⁾

この話はほぼ同じ形で重右衛門話に「笊で（籠で）水を汲む」として伝えられている。しかし、他の重兵衛話を検討してみると、これは馬鹿聾話に近い形で伝えられており、重右衛門のような反骨の主人公ではないことがわかる。さらに、重右衛門話には「笊で水を

汲む」話の続きとも言うべき「石臼の穴」がある。この話は重右衛門の前科にこりた旦那が「底があつて空いている物に水を汲め」と念をおしたのに対し、彼は甕や桶、椀等、あらゆるものに汲むわけである。それを見て旦那が、「石臼の穴が空いてるよ」と一矢報いる話である。⁽⁶⁾ このように続編が生まれることから見て、重兵衛話が先行していたと考えるのが妥当であろう。しかも、両者の名前が似ていることも話の吸収を容易にしたと思われる。もしかすると重右衛門と重兵衛には、弱いながらも吉四六と吉吾のような共合関係があつたのかもしれない。

更に房総南端の安房郡周辺の笑話から、「トウガラシのつくり方」を例にあげる。

番号	話 名	話数	相手方	手 段		地 域		備 考
				大力	言葉	海岸	丘陵	
㉓	米の飯の弁当の仕事 (手甲と脚絆の仕事) (まんがんの仕事) (大歛の仕事)	34	主人		○	○	○	全国に類話多数
㉔	八畳敷の蚊帳泥棒	1	"		○		○	
㉕	上からの屋根葺	2	"		○		○	
㉖	餅は遠火で (唐辛子は遠火で)	10	"		○	○	○	他地域に類話あり
㉗	サルがあがったら	3	"		○		○	
㉘	沢庵風呂	4	"		○	○	○	全国的馬鹿智話
㉙	青い物は草	10	"		○	○	○	類話あり
㉚	笊で水を汲む (籠で水を汲む)	5	"		○	○	○	他地域に類話あり
㉛	風呂を担いで水汲み	1	"	○			○	
㉜	氷の田うない	1	"	○			○	
㉝	トンビ・カラス餅	1	"		○		○	
㉞	南瓜の肥料	1	"		○		○	
㉟	ひとり駕籠 (二人扶の駕籠担ぎ)	10	" (旗本)	○		○	○	全国に類話多数
㉟	九万のハチ	1	大名		○			類話あり
㉟	小ちゃい侍	1	武士		○			
㉟	先に入浴	1	代官		○		○	
㉟	役入を叩く	2	"		○		○	
㉟	鷹匠を叩く (鷹匠をどなる)	6	鷹匠		○	○	○	
㉟	鷹匠の頭に小便	1	"		○		○	
㉟	うるさい鷹番 (鷹匠の安眠妨害) (鷹の首をひねる)	7	"		○	○	○	
㉟	石臼の穴	1	主人				○	主人公が逆にやりこめられる話 (類話あり)
㉟	食べすぎ	1	"				○	
㉟	何にもなかつた	4	"				○	
㉟	年季明けの涙 (久兵衛の機転丸)	18	"			○	○	
計		205		10	30	24	38	

重右衛門話・話型比較表

番號	話名	話数	相手方	手段		地域		備考
				大力	言葉	海岸	丘陵	
①	釣瓶に貯金	1	なし				○	主人公自身について
②	歩くのは嫌い	1	なし				○	主人公自身について
③	上り坂やりなおし	3	村人	○			○	
④	垣根しばり	3	〃		○	○	○	
⑤	豹の皮の屋根 (豹の皮の敷物)	4	〃 (大名)		○	○	○	他地域に類話あり
⑥	原木の火事	1	村人		○	○		
⑦	種三斗まき	2	〃		○	○		類話あり
⑧	杉丸太の天びん棒	1	〃	○			○	
⑨	手をはさむ	1	植木屋		○	○		
⑩	にせ六部	1	六部		○	○		
⑪	田うない競争	1	村人	○			○	
⑫	車もカタワじや	1	主人		○		○	
⑬	舟には乗れる	3	〃		○	○	○	
⑭	給金ふみ倒し	7	〃		○	○	○	
⑮	一背畠	4	〃	○			○	
⑯	一直線の田うない (寺の庭まで) (よその田んぼまで) (隣の村まで) (カラスが目印) (白サギが目印)	6	主人	○		○	○	他地域に類話あり
⑰	広い部屋	1	〃		○	○		
⑱	日帰りの大山講	1	〃	○		○		
⑲	証文の裏	6	〃		○	○	○	
⑳	こちら側の御飯	2	〃		○		○	
㉑	二人前食べる理由	1	〃		○		○	
㉒	いざとなつたらの仕事 (繩ない仕事) (田うない仕事) (萱刈り仕事) (山萱運び) (山木刈り仕事)	28	〃	○		○	○	他地域に類話あり

これは愚か村の「増間話」からの一例であり、重右衛門話では江戸名物の火事に条件づけられて「餅は遠火で焼け」というという且那をやり込める類話を多く生み出しているのだ。先述した「沢庵風呂」も増間話経由で重右衛門話へ組み入れられたと見るのがよからう。

以上のように考えると、房総方面から下総へと笑話が伝えられたという一つの予測が成立つ。事実、房総と言えば、下総の東京湾沿岸の船材を供給していたのである。出稼ぎ船大工や木挽、そして房総の兵陸地帯からの屋根屋や桶屋といった渡世人や若衆奉公人の往来によって、下総方面へ多くの笑話がもたらされたのかもしれない。

三

ところで、重右衛門話の最大の特色は、主人公が実在した江戸中期から現在に至るまで一貫して首都圏に近い所で語り継がれてきたことである。それ故に近年の東京文化はともかくも、江戸文化の影響があつたのではないかという疑問が湧いてくる。

そこで改めて全体の資料を読みくらべみると、微妙ながらも地域的な差異があることに気がつく。つまり、近年まで半農半漁だった東京湾沿岸地域と田畠農業の丘陵地域に見る重右衛門話の分布差である。話型比較表は便宜上相手方によつて、話を配列してある。この表を見て第一に気がつくことは、権力者に対し、大力によつてやりこめる話が、丘陵地帯には多いことである。しかも、「杉丸

太の天秤棒」「一・背畑」「氷の田うない」「上り坂やりなおし」など、海岸地域には見られない話が出てくるのである。現在の船橋市や市川市の北部から松戸市、鎌ヶ谷市といった丘陵地帯は、江戸時代大名領（田中藩）、旗本領（朝比奈氏）、寺社領（總寧寺、法華経寺）が複雑に入りこんでいた。そして、中世の入江だった谷合の湿地は戦前胸までも浸かる泥田であり、反面乾いた台地はやせており、灌水と下肥補給を絶えず必要としていた。このような土地を耕作する農民達の中に、地主の旦那を力業でやりこめる笑話が生まれたのは、けだし当然と言えよう。

一方海岸地域では落し晰的色彩を帯びた話が極立つていて、これが、注目に値する。つまり、丘陵地帯には見られない「にせ六部」「原本の火事（二万户の大火）」や「小さいくせに」と言った話がある。しかるに江戸川河口以南の沿岸地帯は、如何なる様相であったのだろうか。現船橋駅近くまでは、江戸時代幕府直轄の天領で、行徳領といわれていた。徳川幕府が当地を重要視したのは、戦略物資としての塩田の確保であり、かつ鷹狩りや野馬調達の場としてであった。また、江戸庶民レベルで見た場合、行徳は成田不動尊詣の拠点として有用であった。事実、元禄年間より江戸小網町から行徳（現市川市）までの船便が往路は成田詣の客を、復路は塩を運んで航行していたのである。それ故に、江戸の庶民文化が行徳領に入り、重右衛門話に恰好の笑話をもたらしたことは十分推察できるのである。ここでは「小ちやい侍の話」を例にあげる。

両国の橋の向うがわが江戸で、こっちがわは、下総の国だよ

ね。橋をこして向こうへ一日本橋の方だから江戸の方へ使
い行つて来てくれって言われたんだつてさ。行つたところが、

向こうからね、ちいちやい侍がこんな大きな刀さしてね、そして
ねえ、威張つてやつて来んだつて。すると、じゅえむ（重右衛門）
（門）どんがこっちから見て、あのやろう、あんなちっぽけなくせ
に、こんな長え刃さして来やがら、ひとつ、からかつてやると思
つてね。（中略）

「こんなちちえーくせに、こんな、いっけえ（大きい）ものさ
しやがら！ こんなちちえーもんがこんないつけえもの、さし
やがら」

つて大きな声して歩くんだつてさ。歩つてる人がみんな笑っちゃ
つてんだつて。（以下省略）

（話 越永利一）

話者がこの話を『甲子夜話』にあると前置きしてから語つてゐる
ことも興味深いが、安永十年の『当世新話、はつ鰐』を締めくくる
「小人」の話を見ることにする。

「いたでちいさく生しき土、屋敷の物見の下を通れば女子ども、
「あれ来てみなさい、ちいさな男が通る」と日々に笑を聞いて、残念に思へど胸をおさへて帰り、友達の所へ
行、此はなしをすればそういわいでだまつて居事が有るものか。
山淑は小粒でも辛ひと、なぜ云わなんだ」

「成程そあいへばよかつた。そんなら翌貴様と一所に行、今日の
無念をはらそう」

と、其翌連立行たち（13）（以下省略）

二つの話はこの後それぞれ違う結末へ至る。重右衛門話は、怒つ
た侍に対して「小さいくせに大きな人を刺す蟻が生意氣だ」とござ
かしてしまふのに対し、後者は「小粒」を落して「山椒は辛い」と
言つてしまふ話になつてゐる。従つて「小人」話が直接重右衛門話
に移入されたとは断定しにくい。しかし、武士を笑いものにするこ
れらの話は、共に江戸町民の隆盛なしには生まれてこなかつたもの
であろう。

更に江戸文化を暗示する話が、もう一つあり、注目に値する。
「証文の裏」は重右衛門がちょっととした悪天候の時にも農良へ出な
いので日那が咎めると、証文の裏に「東風吹かば、いやで候ふ北風
は申すに及ばず……」と書いてあつたという話である。ここには他
のおどけ者話には例を見ない主人公のうた詠みが出てくる。残念な
がら今のところ話者達から、うたの完全な形は聞かれないが、「年
季明けの涙」では、重右衛門が別れのうたを残したとも言はれて
いる。これらのことから判断すると、重右衛門話には江戸中期の狂歌
の影響が考えられようか。しかし、十分にそれを証拠づけることは
できないので、ここでは一応仮説として提示しておくに留めたい。

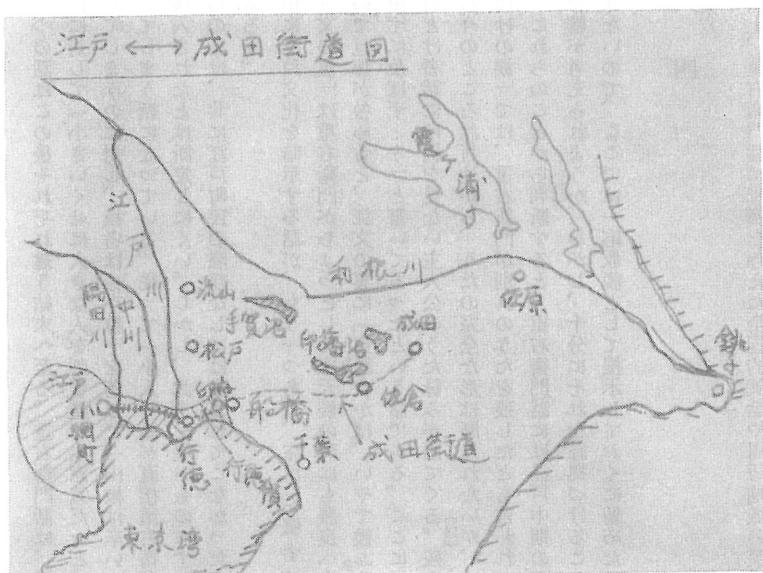
四

以上、重右衛門話に影響を与えた全国的笑話や周辺地域の笑話と
文化的背景等を概観してきたが、それらの話を除外すると、核とな

る話は大部数が限られてこよう。それでも重右衛門話として残るの話であることに、何ら變りはない。おどけ者の代表格である西の吉四六がほとんど言葉による頓智のみに依存しているのに対し、東の重右衛門は「言葉」と「力」の両方を兼備していたことは、極立つた特徴ではないだろうか。従つて、実在した重右衛門は如何なる人物であり、現在に至るまで増幅してきた話の形成が、伝承する人々の心意とどう関わってきたか、という大きな問題に遭遇することになる。

そこで、最後に重右衛門話の原点である印内地区に、思いを馳せてみる。印内は行徳領に含まれ、幕府天領の奥近くに位置していたが、この地理条件は極めて重要な意味を持つ。江戸川の砂洲であつた本行徳とは異なり、印内は海岸に丘陵がせまつて半農半漁の地域であった。しかも、三泊四日を要する成田詣の客が、江戸を出発して初日と帰りの宿をとる船橋地区に隣接していた。丘陵地は畑作のみならず、鷹狩り場として、幕府役人が他の辺境地域より気軽に出入りする所でもあつた。そして、背後には既に述べたように、田畠農業の諸領が統いていたのである。江戸町民風俗と農業民俗が合流する所——それが、まさに印内地区であったのである。重右衛門話に農民の「力業」と江戸町民の「言葉」が付与された理由が、ここにあると言えよう。

話は前後するが、重右衛門について、文化七年（一八一〇）の『葛飾誌略』の一記事が興味をひく。



一、重右衛門。印内の重右衛門とて児童口づきに残り、専ら噂する事也。然れども、児童の云々するとは大に相違せり。生得力、力量有り、又頓才も有り。元、葛西氏の臣下の家にて、良き百姓也けるが、兎角に人を非にするの癖あり。或年、隣家の稻を盗みて公辺に及び、數十日間御咎め被仰付、事相済みたり。此理合の事面白しと雖も、事長ければ爰に略す。大岡越前守様の時分にて、凡百五十余年に及ぶ。近年のやうにいへど左にあらず。⁽¹⁶⁾ (傍点筆者)

重右衛門が生存していた時代から百年以上を経ているとはいえ、示唆に富む記事である。ここに記されているように、人を非にする悪戯が高じて刑に服するような事件を起こした人物だったとすると、旦那や幕府役人にまで奇行を成したことは、十分考えられようか。検見役人を叩いたり、鷹匠の鷹をひねり殺すというような話の真偽はともかく、「力量」と「頓才」——これこそ、権力に近い所にいた民衆が絶えず求めた武器であった。それが明治以降終戦に至るまで続いた地主制度下、奉公人や小作人の心の代弁者として、重右衛門話が語り継がれてきた所以である。このことは、数次の小作争議に揺れ動いた後背地（特に船橋市丸山地区、市川市曾谷地区等）の話者による重右衛門話に、地主の旦那や幕府役人をこき降ろす話が多く、また最初に語られる現象を指摘すれば足りようか。

なお、私事ながら重右衛門話の採訪調査は未だ続行中であり、更に新話や多くの類話が発見される可能性もあり、この一文も示唆にとどめ、今後の叩き台とする次第である。

注1

重右衛門については、享保十三年（一七二八）二月十五日の印内村『第六天宮奉納謝日記』に、名前が見えている。また船

橋市教育委員会の綿貫啓一氏より、次のような指摘が寄せられたので、記して感謝したい。「重右衛門については享保十年六月の『下総国葛飾郡印内村烟方地押帳』に上畠二畝、中畠九畝二歩、下畠五畝十歩、下々畠一反三畝十歩を所有し、『下総国葛飾郡印内村屋敷地押帳』に間口八間と六間の屋敷地一畝十八歩を所有する。右衛門が見えており……。」ここからわざかな耕地と狭い屋敷を持つ下層農民の姿が想像される。

2 参考文献は、『日本昔話通観』（同朋舎）、『日本の民話』（未来社）、『民話と文学、第2号』（特集・日本のおどけ者たち）（昭和52年）である。

3 挑著『印内の重右衛門話——下総の笑話』（竲書房、昭和56年）54頁

4 他の資料では、重右衛門話の周辺に平右衛門話（佐倉）、達斎話（茨城）など、類話が見られるが、はつきりした関連性はわからないので、今後の検討課題としたい。

5 中嶋清一編著『房総の笑いばなし』（土筆書房、昭和53年）、68—69頁

6 『印内の重右衛門話——下総の笑話』89頁

7 『房総の笑いばなし』34頁

8 市川市教育委員会『市川——市民読本』（昭和54年）164頁参考照。

9 『市川——市民読本』179—184頁参照。江戸から江戸川を利用

(なお研究発表草稿に全面的に加筆したことを付記しておく。)

(あひこ しゅうぎ・鶴見大学)

して行われた下肥運搬は、元禄時代より葛西船（下肥船）の發達となつて、戦前まで続いたのである。

10 宮崎長藏・綿貫喜郎共著『行徳物語』238頁参照。徳川家康は行徳塩を直接江戸城下に回送させるため、小名木川から新川を開さくして中川と江戸川を結び、行徳川と称されたのである。

11 『行徳物語』271—272頁。江戸小網町から行徳川経由で船で行徳に渡り、陸路船橋、佐倉を経て成田へ向かつた。他に成田参詣は、陸路両国、小松川、市川、船橋、あるいは、千住から新宿を経て船橋に入るコースがあつた。

12 行徳昔話の会『行徳昔語り』第八号（昭和56年8月）20—21頁。

13 宮尾しげを編注『江戸小咄集1』（平凡社、東洋文庫）221—222頁。

14 『印内の重右衛門話』25—26頁参照。重右衛門のうたは、「北風は言うに及ばず、東風もいやで候ふ」や「北風はいやで候ふ、雨の日は申すに及ばず」の類である。おそらく晴天と南風以外の仕事はいやだ、というような狂歌ではないかと想像される。

15 重右衛門と狂歌との関連性については、昭和58年6月4日、早稲田大学にて開催の日本口承文芸学会大会後、井上隆明氏によつて指摘された。今後更に検討すべき課題として残し、記して氏に謝意を表すものである。

16 千葉県郷土資料刊行会『改訂 房総叢書 全六輯』（昭和47年）474頁